

## 教育改革に生きて

——アメリカ南部出身の白人女性教師のライフヒストリーから——

塚 田 守

To Live for Educational Reforms

—A Life History of a Southern Female Teacher in the U.S.—

Mamoru TSUKADA

### はじめに

本稿は教師に対しての一連のライフヒストリー研究の展開である（塚田 1998年、塚田 2002年）。今までの明らかになったことは大きく次の2点である。まず、教師のライフヒストリーは歴史的変化とダイナミックな関係があり、個人のライフヒストリーはより大きな歴史的文脈に位置付けられることによってより理解されると同時に、個人のライフヒストリーの分析によって、歴史が個人の生活にいかに影響するかの理解ができる。その意味では、教師としてどのように生きるかは世代的な違いがある。第2として、ジェンダーの問題を抜きにして、教師のライフヒストリーを語ることはできないという点である。同じ教師であっても女性教師か男性教師かによって、そのライフヒストリーは大きく異なっている。

教師のライフヒストリーにおけるこのような「歴史的要因（世代的な違い）」と「社会的な要因（ジェンダーや職業を限定したことなど）」の分析を踏まえ、「文化的要因」を加えようとする試みが本稿の目的である。本稿は、アメリカ人の教師に焦点を当て、アメリカ社会の歴史的背景と社会的要因と教師との関係をライフヒストリーとして分析し、日本の教師との比較を行おうとするものである<sup>1)</sup>。

### 教師のライフヒストリー研究

教師のライフヒストリー研究は最近広く展開されているのでそれを要約するのではなく、最近の代表的な研究に限定して言及し、筆者のライフヒストリー研究の枠組みを提示する。

日本では、山崎（2002年）は教師のライフコース論的方法的検討を踏まえ、「教師の力量」と「教師の発達」をテーマとして、「年輩教師層」から「若手教師層」までのライフコースを統計的に分析すると同時に質的分析を行い、教師の力量観の「生成型」と「選択的変容型」の発達観という考え方を提唱している。山崎は基本的に「個人的時間」「社会的

時間」「歴史的時間」のダイナミックな関係を分析しながら、教師教育のあり方を展開している。

イギリスでもまた、グッドソン（2001年）も教師の「声」に耳を傾けることの重要性を強調し、教師が語るストーリーの中の「歴史的要因や構造的制約への対応」を分析することで、1人の教師がいかにその時代の「宗教的、社会的、心理的、経済的動向」に影響されたかを分析することにより、いままでの学校記述やカリキュラム史の研究を超える契機になると指摘している。そして、教師の発達、専門的な実践はそれを行う者の生活全体への視点が必要であるとも言っている。

さらに、アメリカにおいても、『教師教育クォーターリー（Teacher Education Quarterly）』の特集 *Lives of Teachers*（2001年）は教師のライフヒストリー研究の重要性を強調している。その中でも、マッチモア（2001年）は、教師の考え方を知るには、決して「外部から」ではなく「内部から」研究すべきであるとし、ライフヒストリー研究の重要性について述べている。そして、調査対象者の「アンナ」の literacy に関しての考え方の変化を彼女のライフヒストリーの文脈で論じている。このマッチモアのライフヒストリー研究は「アンナ」の教師としての成長に当て、「アンナ」の教育観の中心をなす literacy についての考え方がいかに形成されたかを彼女の「声」を引用し、分析されているものである。

以上のような教師のライフヒストリーの最近の研究の枠組みに学び、本稿は、1人のアメリカ南部出身の女性教師（キャロル、仮名）をより広い社会的変動の文脈に位置付け、彼女がいかにして教育改革に参加するようになったかを描写しながら、個人レベルでのジェンダー問題についても論じるものである。

## 調査方法

調査対象者キャロルに対して2001年8月7日及び2002年8月28日にそれぞれ2時間半程度のインタビュー調査を行った。インタビューは調査対象者の研究室で行い、秘書に依頼し、電話などによる中断のない状況で行われた。この2回のインタビューは全て録音し、テープ起こしを行った。これ以外に録音せずに雑談形式でさまざまな質問をして事実関係を確認した。インタビューの方法としては、調査対象者の教師としての「ストーリー」を聞きたいということで始め、自由に話してもらう形式をとったが、具体的な質問項目としては、1）なぜ、教師になったのか、2）教師になってからの経験はどのようなものか、3）教師をやっていて楽しいと思うこと、苦しいと思うこと、4）最近のアメリカの教育についての意見、などである。教師研究の一環であるという説明でインタビューを行ったので、教師としてのものの考え方、行動などを中心に聞いていったが、話の流れの中で個人的「事件」にも言及し、その時の心情をできるだけ詳しく聞いた。

分析の手続きとしては、まず、2001年のインタビューのテープ起こしとその時の分析ノートをもとに、レポートとしてまとめた。そして、2002年の再度のインタビューでは、レポートをまとめる段階であいまいな点などを対象者のライフストーリーに関係した点に絞って具体的に聞く方法を取った。今回の分析では、対象者のライフヒストリーを中心にまとめたので、サン・ノゼの教育に関しての調査対象者の意見などには言及していないが、アメリカ教育一般、サン・ノゼの教育状況に関しての教師の意見、考え方などの分析は、

別の研究としてまとめられる予定である。

## キャロルのライフヒストリー

### 南部の貧しい白人家族に生まれて

大恐慌の時代に育った両親とも貧しかった。父方の祖父は郵便配達人で賃金が低く、アルバイトとして農場で働いていたほどであった。母親は、12人兄弟大家族のシェア・クロパーの娘として生まれた。しかし、両親は二人とも、小学校、中学校とも成績が飛びぬけて良い生徒であった。父親は1933年の大恐慌の時代に医学部に行きたいと思ったが、デューク大学の授業料（75ドル）が高く、断念せざるを得なかった。学問があり教養もあった父親は小さい時から、数学のゲームなどで子どもたちを訓練する人だった。母親も老いてもラテン語で詩を暗誦することができるほどの人物であった。

そのような「文化的資本」を持った両親であったので、自分達の生活を犠牲にしても、子どもにはより良い教育を受けさせると決心をしていた。高等教育を受けることなど夢にも思わなかった人々の中にいて、子ども達すべてが高等教育を受けられたのは、このような両親の決心によってであった。

両親たちはよく読書する人たちで、「貧しくて他にすることはなかった」こともあるが、農作業をして読書をする生活だった。プロテスタントの勤労倫理に基づき、家族全員、学校で良い成績を取ることを期待されていた。家族は経済的に貧しく、「プアー・ホワイト」(poor white)と呼ばれていたが、その下にはまだ人々（大体は黒人であった）がいることで安心してた。土地もあったし、自由もあったので何も不自由は感じていなかった。特に、本は図書館にあったし、キャロルは「15歳になる頃までには、小さな町の図書館にあるすべての本を読み終えていました」と読書経験についてふれた。

父親は、小さな工場を経営していたが、そこの従業員のほとんどが黒人であった。工場がうまくいっているときには、従業員と食べ物をつかちあっていた。「このような小さい時の経験があったから、黒人に対する偏見を持たなかったのかもしれない」とキャロルは言う。

### 南部の州立大学に入学して

当時のサウスカロライナ州では、「高校卒業する頃までに、結婚していないか婚約していない女性は社会的な落伍者である」と言われた。クラスでそのような状態にないのはキャロルを含めたたった4人だけだった。父親がキャロルに望んでいた最高の職業は、家具屋の秘書になることだった。女性としてなれる理想の職業は、秘書、看護婦、教師であったが、4年間秘書としてアルバイトをしていた彼女にとっては秘書になることは魅力的なことではなかった。

両親は大学へ行くことを勧めなかったが、キャロルが本気で行くと言った時、父親は反対して、「息子たちが大学に行けるほどには貯金はできるけれど、娘は行かせることはできない」と言った。それを聞いた母親は「キャロルは長女なのです。弟たち以上に行くべきです。たとえば、私の屍を超えさせてでも行かせます」と言って、父親を説き伏せた。

小学校、中学校の時に、すばらしい英語の先生に出会っていることが大学に進学する一つの要因でもあった。大学への進学を考えた時に問題になったのは学費であった。近くの

州立大学で授業料の安い大学に進学するために大学の病院でバイトをし続けて、400ドルを自分で稼いだ。今から考えると大した額ではないが、当時としては多額であった。両親が授業料の半分を出してくれたので、バイトしながら学業に専念した。

1957年、ノースカロライナ州立の女子大学に入学した。女性も医者になれることを証明しようと最初の2年間は、医学部の前期課程で学んでいたが、手術の時の血を見て医者にはなりたくないと考え、文学部に進むことにした。キャロルが大学に入学した年には、ブラウン判決から3年経っていたが、州は形式的な「人種隔離撤廃」しか実行せず、300人いた学生のうち、黒人の学生は2人だけだった。そして、目にみえない差別はまだ根強かった。たとえば、黒人の友人で、美術専攻の学生がいたが、彼女が壁画を描いたことが問題になった。もちろん、壁に絵を描いてはいけないという規則があったが、「その壁画が学生部長によって消されたのは、彼女が黒人であったからだと思います」とキャロルは言う。このような経験から、白人は一般的に「リップサービス」として「人種差別撤廃」を言っていたが、キャロル自身としては、「私はそんな人々と一緒になりたくない」と心に強く決心していた。グリーンズボロは1950年代の終わりから1960年代のはじめにかけて、公民権運動の拠点となったところであった。

#### 北部の大学の大学院に入学し結婚して

1961年大学院に入学したフィラデルフィアに行った時も、公民権運動は盛んであった。そこには大きな運動というものはなかったが、デモ行進やヴェトナム反戦抗議などがあった。いつも何らかの活動があった。公民権運動が盛んだったのは、バークレーやミシガンなどだけではなかった。そして、北部にも南部とは異なった人種隔離があった。南部では鉄道などで人種隔離が明確になされていたが、北部では明確な境界線はないが、すべての人が常識的に知っている人種隔離の境界線がいたるところにあった。

大学院の時に結婚し、25歳で息子が生まれた。息子が生まれる頃までには博士課程修了までに後2科目を残すだけになっていた。しかし、「息子のために大学院を辞めて7年間子育てを楽しんだ」。子育てを楽しみながら家庭教師などをしていたが、子どもたちがシェークスピアを読めないことに驚き、読み方を教えた。その時教えることに喜びを見出した。そして、息子が小学2年生の時に、大学院での研究をすべてをやり返すつもりで、教育学に専攻を変えた。英文学で取った科目は教育学にはまったく関係なかったが、「子供たちが読み方を学び、偉大な作品を理解できればよい」という思いで、教育学を専攻した。

北部の公民権運動の影響で、1960年代後半から1970年代前半は、さまざまな革新的な教育実践が行われていた。大学院に通いながらパートタイムで教え始め、キャロルはその運動の1つである「オープン・スクール運動」に関わることになった。子どもたちは地下鉄に行ったり、倉庫に行ったりして、そこで体験したことを自由に感想文として書いていた。この運動に参加することにより、「何かを今までとは異なった方法でやってみることは楽しいことだ」ということを学んだ。教室の壁を取り除いて、授業をする方法。世界を観察し、「現実世界の経験から学ぶ」という方式で、「本からではなく、人々から学ぶ」ということであった。

### 保守的な夫と離婚して南部へ

夫の父親は独裁的できわめて「ドイツ的」であった。父親は「独立心を持った女性」が好きではなかった。妻がコンサートのピアニストであったが、そのピアノを売ってしまった。「お前はピアノを弾いて喜んでいるようだ。だから、ピアノを売った。それを売る権利は私にある」というほどの人物であった。

キャロルの夫はそれほどではなく、大学院に行くことには反対しなかったが、仕事することにはまったく反対だった。「妻は働かないものだ」という信念を持っていた。結婚の初期は結婚に満足していた。特に、息子が小さい時はそうで、「子どものため」に家にいることを母親として満足していた。フルタイムで働こうとしたら、夫が反対した。キャロルの「フルタイムで働きたい」という真剣な決意が離婚の原因になった。

別居はしてもしばらく離婚せずにいたのは、「子どもにとって、両親がそろっていた方が良いのではないか」と考えていたからだだったとキャロルは説明する。息子が10代になった時、決心がついた。「これでは、息子にもよくない」と思ったからであった。別居中の時も、2週間に1度息子を父親に会わせるようにしていた。父親の存在を忘れないようにとそうのようにしていたが、今となってはそのことは息子にとって良かったように思えると振り返る。

離婚するまで「オープン・スクール運動」に関与しながら、9年間教えた経験は大きかった。教室を持たず、子供たちはさまざまなものを操作する形で、幾何などを学ぶという新しい教授法やスタイルはその後の教師生活で大きな影響を与えた。

しかし、ニュージャージーの学校ではドラッグの問題などもあり、「息子のためにも」ノースカロライナにいった方がいいのではないかと考え、南部に戻る決心をした。

### 南部州、ノースカロライナ州に戻って教師として改革にかかわって

1976年にノースカロライナに戻る。37歳の時ノースカロライナ州立大学大学院で教育博士号取得をめざしながら、3年間教師として働き始めた。白人ばかりのニュージャージーで働いた経験の後、黒人が多いノースカロライナで働くのは面白い体験であった。ノースカロライナの教育はニュージャージーよりはるかに遅れていたことにキャロルは驚いた。ノースカロライナでもさまざまな改革の動きがあったが、それらすべてはニュージャージーで実際、実験的に行われてきたことであった。

キャロルは北部での9年間の経験を生かし、進歩的教育を実践していった。最初は社会経済的に低い地域の学校で教えることになった。生徒の学業成績が低く、貧しい学校であった。「読み方」と「算数」の成績を1年以内に上げた。テストの得点さえ上げれば、誰も文句は言わなかった。実験的な授業をやって、初級読解と書き方の業績に関して「知事賞」を授与された。革新的な教授方法ですでに有名になり、地方のテレビなどにでるほどになっていた。テレビで息子の名前を出した時、「普通の生活したいので、学校に来ないでくれ。そして、二度と自分の名前を出さないように」と言われた。息子13歳の時であり、息子も独立し、家事などを役割分担するまでになっていた。

### 管理職として教育改革をめざして

1人の教師としての授業内での改革に限界を感じ、1980年から校長になった。教師とし

てどのようにしたら「教えても効果がでないという悪循環を断ち切る」ことができるかを考えて、校長になったらそれを変革できるのではないかと思えた。校長になることによって、単に30人の生徒を変えるのではなく、教師を変えることで教えることに大きな変化をもたらせるのではないかと考えたのであった。

校長になってから、学校内でさまざまな改革を行った。たとえば、ある教師が何か異なったことを試したいと言ったら、財政的にも、教材など資源面でもいろいろな形で、その教師をサポートした。何か実験的な授業を行いたいと言ったら、それもサポートした。子どもにとって良いと思える改革への萌芽があれば、それを育てるようにさまざまな形のサポートを行った。さまざまな新しい方法で、試験の成績を上げたので教育委員会からも反対はなかった。しかし、結果的に教師たちの意識を変えることは当時のキャロルには不可能に思えた。

1982年、44歳の時、教育学博士号取得後、教師教育について教えるために黒人の小さな単科大学に勤めた。「その大学は財政的な問題のために閉鎖されたが、良い経験になった」と振り返る。教師志望の黒人学生に対して、白人の学校で黒人教師として教えるとはどのようなことか、その町の教育システムの問題や大学のレベルの低さなどについて教えた。そこで働くことにより、キャロルは黒人学生に対して新しいネットワークを作ることができた。

その後、小さな単科大学、サウスカロライナ州のライムストーン大学で教えた。主に白人の学生が中心であった。教育学部を教職の資格認可学部にするまでの改革を行った。そこでは主に、教職の資格認定の課程との関連で州の校長の研修に関わった。その後、教師教育の校長資格認定のディレクターとして3年間勤めた。

### サウスカロライナ州教育省学校リーダーシップのための改善センター長として

教師と校長を訓練するプログラムで、サウスカロライナ州の教育省が州全体の教育システムのリストラクチャー（再構成）するための教育改革をデザインする適任者を探していた。そこのリストラクチャー・センターのディレクターに70人の候補者から選ばれ、任命された。「私はこのポジションを非常に喜びました。サウスカロライナ州の教育を変えることができるプログラムであったからです」とセンター長として働いていたことについて、誇りを持って語った。

当時のサウスカロライナ州は最も遅れた州で、教育レベルは全国「51位」と言われたほどである。アメリカ合衆国連邦の州の数は50なので、50位にもなれないほど遅れているという評判であった。キャロルによれば、当時のサウスカロライナ州の教育の問題は3点あった。まず、ブラウン判決以降もほかの州に比べて人種問題解決への変化が遅かった。次に、貧困の問題があった。山の奥に住んでいる子どもたちは海も見ただけもなく、閉鎖的な世界に生きていた。第3の問題は政治的なことがあった。裕福な白人が貧しい黒人に教育を与えたくないと考えていた。キャロルによるとこの3番目の問題が教育の遅れのもっとも大きな理由ではないかということであった。ブラウン判決の影響を受け、学校が統合されなければいけないことになった場合、教育委員会はその学校を企業に売るようなこともやった。そうすることによって、統合はしなくてよかったからである。

しかし、このような保守的な南部州にも変革を望む人たちがいたので、センター長とし

て340モデルスクールに働きかけることができた。特に、「変革のための管理」(Management for Change)として、ジョン・グッドラドが全国的なネットワーク作りをした時(Goodlad 1994)、人種民族問題の専門家と共に州全地域を講演して回った。1991年でも、白人と黒人を平等に扱うべきであるという考えを持たない人もいた。人種民族的マイノリティの教師のリクルート、大学のカリキュラムの変更、子供たちはどのように学ぶのかの研究、大学の教師教育などに関する改革をしようとした。

リーダーシップのためのセミナーを行い、ロン・エドモンドの「効果的な学校」(Edmonds 1984)を実践して、「ピア・コーチング」(Gottesman and Jennings, 1994)の考えを考案して実践した。「教師は重要なプレーヤーである」という前提でプロジェクトを展開していった。この試みは、ノースカロライナではじめて成功したと言われた。「専門職の発達」に関する研究をまとめ、実際の教室の中で実践していった。他の研修ではさまざまなことを学ぶが、応用したり実践したりする時、自分で行わなければならないが、このプロジェクトはその点で異なっていた。研究に基づいたことを実験的にを行い、それを現場の教師が実際に使えるようにまで具体的な教材として提示し、現場の教師の教授法に統合する方法を取った。

ロン・エドモンドの考え方を前提として、子どもが成功するために教師はすべての子どもに責任を持たなければならない、というのがキャロルの教育観であった。「もしあなたが学校の教師だったら、裕福な子どもだけでなく貧しい子どもに対しても責任をとる必要がある」「もし貧しい子を教えることができれば、裕福な子どもは教えることができる」ということであるが、キャロルは「人生の残りをこのことを証明するのにかけてみたい」と今でも言っている。

改革の背後にあったものは、『危機に立つ国家』(A Nation at Risk)であった。1960年と1970年には多くの市民的反乱があったので、1980年代は、その潮流に対する反動と呼べるものであったかもしれない。子どもが習わなければならないものは何か、子どもには何が必要かなどの視点が重要視された。州知事がはじめたという意味ではこの改革は「トップ・ダウン」だったけれど、知事は改革の考えなどについては教育者のものを採用していたので、革新的な改革であったとキャロルは振り返る。

5年間の任期を終えた時、リベラルな知事がクリントン大統領の指名で連邦に招聘された。リベラルな知事がいなくなったことで、サウスカロライナ州はまた反動的な州になった。「5年間で作ってきたものが、文字どおり5分間で崩されていったようだった」と南部の保守性と政治的力の強大さを振り返る。

### 大学教授に戻って、校長のためのリーダーシップ教育をめざして

センター長の職を辞してから、ノースカロライナ州のコロンビア大学の教育学部の学部長になった。母親がアルツハイマー病にかかったので、その介護のために近くの大学に勤めることにした。「アルツハイマーは人間に起こりうる最悪のことです。母をあのよう扱ったことで果たしてよかったのか今でも疑問に思うことがありますよ」と痴呆の母親との3年間を振り返った時に、キャロルの顔は曇った。キャロルは周りにいる女性のことにも触れ、「女性として生きるということは、小さい時は母親と父親に愛情を注ぎ、結婚したら主婦として家族や夫の世話をして、子どもが大きくなって自由になり自分1人でそとに

出かけようとした時に、年老いた両親の面倒を見なくてはいけないのですね」と女性としてのハンディについて軽く語った。

介護で苦しかった時に、サンフランシスコに住む息子のところに気分転換に行っていた。その時、「唯一の家族である息子の近くに住むこともいいのではないかと思えた」と言う。アイオワ大学と中西部の大学院大学ミシガン大学にも内定していたが、その中では最もレベルが低いとされたカリフォルニア州立大学サン・ノゼ校に就職した。3年前の60歳の時であった。

サン・ノゼを気に入っている点は、「人種民族的に多様であることで、アイオワのように白人ばかりの顔を見るのには飽きた」からだという。また、「サン・ノゼは世界の縮図であって、この地域の問題は全米のすべての地域の問題であるので、ここでリーダーシップ教育に携わりたい」と考えた。そして、何よりも、「息子の住むサンフランシスコから車で1時間以内の所に住めることが嬉しい」と言う。

最後に、今行っている校長教育で一番大切なものは何かを尋ねてみた。2点が重要であると指摘した。第1点目は、「子どもに適切な教育を行っているかどうか」である。次の点としては、教師にとって何が正しいかを考えるということであり、教師たちを専門職として扱い、必要なことがあればサポートすることである。

キャロルの教えているリーダーシップというのは2つの側面を持っている。将来に向けてのビジョンとそれを実行するための具体的方策 (Visionary and Details) であり、それら両者が重要であると言う。人はビジョンを持って語り偉大な夢を持ち、なんでもできそうに思うかもしれない。しかし、実際の夢を実現するには、組織的に考え、細部にわたって準備すべきであると指摘する。「幼稚園の教師に『あなたのすべきことはすばらしい子どもたちを愛することです』というのでは不十分です。どのように教えるかを教えなければならぬのです」と管理職のあり方に触れ、話を終えた。

## 分 析

キャロルのライフヒストリーから何が読み取れるだろうか。

まず第1に、ジェンダーの問題である。ベティー・フリーダンの『女らしさの神話』は1963年に出版されフェミニズム運動を起こしたが、キャロルが高校生だった頃の1950年代の南部では、ジェンダーによる男女の役割期待がはっきりしていた。それにもかかわらず、貧しいが文化的資本があった両親のもとで育ったことで、キャロルは当時の一般的な女性のコースをたどらず、大学進学、大学院と進学して行った。それはまた、一世代前の母親が自分自身が果たせなかった夢を娘に託した結果でもあったのであろう。大学院に進んだキャロルであったが、大学教授と結婚した後は育児を楽しむ女性になった。その意味では、キャロルは必ずしもフェミニストの女性ではなかった。しかし、公民権運動は人種民族的解放だけでなく、フェミニズム運動も推進した。公民権運動などの影響を受けた「オープン・スクール運動」に参加することになり、キャロルは1人の女性として独立し、「社会進出」を望む女性になった。キャロルのそのような変化が保守的なドイツ系の夫との間にギャップを生み出し、離婚の要因になった。

離婚を考えたときのキャロルは、「独立し社会進出をする女性」としてだけではなく、母



親でもあった。結局は息子のことを思い離婚に踏み切ったのであった。そしてまた、息子のことを思い、故郷の南部のノースカロライナに戻るようになった。

教師、校長として働いていた時には、女性としてのハンディは感じなかった。日本の女性教師たちが結婚にとどまり、妻、母、そして、嫁としての役割を果たしながら教師をしていた葛藤は、離婚をしたキャロルにはなかった。働けること自体に感謝しながら、家庭と教職の両立を基本とした日本の「戦後民主教育第一期」の女性教師たち（塚田 2002年）とは対照的に、アメリカの女性教師たちは、働くことへの夫の反対に対して、離婚という手段で独立し社会進出する傾向があるのかもしれない<sup>2)</sup>。

センター長として働いていた時にさまざまな形で「女性に対する軽視」は経験したが、自らが築いたネットワークと蓄積した実力で厳しい差別を経験することはなかったようである。その意味では、公的な分野において社会的に地位を確立した女性に対しては、男女平等が浸透していたのではないかと言える。しかし、母親が痴呆になった時、3年間の介護をせざるを得なかったのは、長女であること以上に、女性であることが重要な要因であることは否定できないであろう。アメリカ社会においても日本と同様に、より私的な分野である老人介護とのかかわりでは、女性が不利な状況にあるといえるかもしれない。

以上、このライフヒストリーから読み取れるキャロルにかかわるジェンダー問題は、進学の局面では家族の「文化的資本」によって克服できたが、結婚の夫婦関係において男女の家族観、仕事観でのギャップが問題になっている。社会進出して十分能力のある専門職として働いている限りにおいては、明確な男女差別を経験しないほどジェンダー問題は表面化されなかったが、母親の介護という局面において、女性にはより多大な負荷を与える可能性があるというジェンダー問題はアメリカでも否定できない。

第2として、アメリカにおける南部の特殊事情、それと関連した人種民族問題と貧困問題の複雑な関係が読める。南部州、特に、サウスカロライナ州は経済的だけでなく、文化教育面でも他の州に比較して劣っていたのは、人種民族問題と貧困問題が密接にかかわっていたということが歴史的、社会学的研究から明らかなことであったことが、キャロルの教育改革志向からも、具体的にその問題が読み取れるであろう。貧困の地域、南部から北部への転居は、キャロルにとっては、単なる地理的移動を意味していなかった。北部の文化的運動の影響を受け南部に戻った時、故郷の南部が教育的に遅れていることに気づき、教育改革を展開することになる。大学卒業するまでの南部で人種民族問題や公民権運動にかかわった個人的経験と北部で革新的教育改革にかかわった経験により、キャロルは教師教育について教えることになる。つまり、生徒の人種民族、経済的状况にかかわらず、すべての子ども達に公平な教育をあたえることができる教師と管理職の教育をするには、どのようなリーダーシップが必要かを教えることが重要であるという考えにいたったのである。サン・ノゼはヒスパニック系やアジア系の移民が多く、人種民族的に多様でかつ貧富の差が大きい地域であるので、キャロルのリーダーシップに関する考え方が管理職のありかたにとって重要であり、そして、そこにこそ、キャロルの果たす役割があると言えるであろう。

人種差別が明らかである南部を出ることによって、人種差別という呪文から解き放たれる保証はないが、偏狭な土地にとどまることなくより広い世界と接触し、時代の影響である公民権運動、「オープン・スクール運動」などを経験することにより、人は変化するもの

であるということが、キャロルのライフヒストリーに読めるのではないか。

### 結びに代えて

人のライフストーリーは「語られたストーリー」であり、調査対象者と調査者の関係性の中で構築されるものである（桜井 2002年）。キャロルのストーリーはアメリカの教育改革に参加した世代前の女性教師のストーリー、アメリカの公民権運動の息吹を感じ、そこにたくましく生きた女性のストーリーとして筆者に語られた。それは、南部に関する人種民族問題のイメージだけが先行し、1950年代から1960時代と貧困地域の「南部」に関する知識がない筆者にとって、新しいアメリカの発見のストーリーであった。

異文化理解を困難にしている問題はさまざま考えられる。まず第1に、アメリカから入ってくる情報の過多とそのゆがみによるアメリカのイメージのステレオタイプ化、第2として、アメリカを研究する時に読む日本人によるアメリカ研究の一般的傾向を内面化してしまう危険性、第3として、研究あるいは情報として書かれたもので描写されるアメリカ社会のイメージの固定化などがあるといえる。

このようなアメリカ文化の不十分な理解、誤解の問題への一つの解決策として、異文化の当事者であるアメリカ人の「声」を聞き取り、その「声」を描写し解釈することで、より等身大のアメリカの姿が見えてくるのではないだろうか。もちろん、日本の教師世界の理解においても、教師自身の「声」を聞いて初めて理解できる可能性がある。その意味では、自分が直接体験しない世界の多くは「異文化世界」であり、その異文化への理解は当事者の「声」を聞くことから始まるべきだろう。本稿で論じられた女性教師のライフヒストリーは1人の描写にすぎないが、アメリカ的社会、文化状況にいるアメリカ人の教師の考え方、行動を理解する手がかりとなり、日本の教師への新しいパースペクティブの提示になるのではないだろうか。また、アメリカ文化に根ざした教師のライフヒストリーを読むことにより、日本の教師が自らを反省的に捉え、「自己発見」する可能性もある。そして、教師のライフヒストリーも多様であり、教師としてのあるべき答えはなく、1人ひとりの教師がそれぞれの置かれた社会、歴史的な文脈でさまざまな影響を受け、その影響を自分の信念との調和をさせながら、生きているという理解につながるであろう。

### 注

- 1) この研究は文部科学省研究補助基盤研究(C) 2001-2003「教師のライフヒストリー-日米比較社会学研究」の補助金を受け筆者が今行っている研究に基づいている。2001年8月3日から21日及び2002年8月27日から9月13日までのカリフォルニア州サン・ノゼにおいてのアメリカ人教師に対するインタビュー調査及び学校訪問を行った。13人(男性=4人、女性=9人)のインタビュー調査を行ったが、今回はそのうちの1人のライフヒストリーに焦点を当て、南部の人種民族問題に関する教育改革と調査対象者の個人のジェンダーの問題に限定した議論をしている。日本での教師に対するインタビュー調査で最も困難であったことは、インタビュー調査対象の獲得であったが、サン・ノゼでの短期間の滞在でこれほどまでのインタビューができたのは、カリフォルニア州立大学サン・ノゼ校のバーバラ・ガッテスマン教授(Professor Barbara Gettesman)のネットワークと協力のおかげである。また、ガッテスマン教授に科研調査のこと

を説明し、筆者を紹介してくれた科研の外国人協力者のジューン・ゴードン教授 (Professor June Gordon) のおかげでもある。両氏の協力がなければこのような外国でのインタビュー調査はできなかった。両氏の協力を心から感謝したい。

- 2) 今回インタビューした60歳代の3人の大学教授たちが教師としてフルタイムとして働こうとした時、それぞれの夫からの強い反対にあった。女性として社会進出を望んでいた彼女たちは、当時のフェミニズム運動の影響で、結婚にとどまることなく離婚することによって、社会的に活躍していった。そして、離婚を契機に大学院に入学し、博士号を取得している。

### 参考文献

- Edmonds, Ron “School effect and teacher effects”, *Social Policy*, Vol. 15. No. 2: 37–39, 1984.
- Goodlad, John I. “The National Network for Educational Renewal”, *Record in Educational Leadership*, Vol. 14, No. 2: 5–10, 1994.
- グッドソン, アイヴァー・F (藤井泰・山田浩之編訳) 『教師のライフヒストリー』晃洋書房, 2001年
- Gottesman, Barbara L. & Jennings, James O. *Peer Coaching for Educators*, Lancaster, PA: Technomic Publishing Company, 1994.
- Muchmore, James, A. “The Story of “Anna”: A Life History Study of the Literacy Beliefs and Teaching Practices of an Urban High School English Teacher”, *The Teacher Education Quarterly*, Vol. 28, No. 3: 89–110, 2001.
- 桜井 厚 『インタビューの社会学』せりか書房 2002年
- 塚田 守 『受験体制と教師のライフコース』多賀出版 1998年
- 『女性教師のライフヒストリー』青山社 2002年
- 山崎準二 『教師のライフコース研究』創風社 2002年

(文学部 英語英米文学科)